



「これって体罰？」と問うこと

牧野 満

桜宮高校の男子生徒の自死を受け、その後、柔道界をはじめ野球界などスポーツ界全体で体罰や暴力を排除していこうとする気運が高まりました。今月号の特集は、体罰や暴力の根絶を目指そうとするものがあります。しかし、中高における部活指導の問題として留めておくのではありません。全ての発達段階や日々の体育の授業に体罰や暴力の根はないのかということを厳しく問い直す契機としたものです。

例えば、小学校での運動会の練習はどうでしょうか。怒号や罵声が飛び交う中で、無意味な行進は行われていないでしょうか。炎天下の練習が際限なく繰り返されてはいないでしょうか。当然、教師は笑顔を失い、険しい顔をして指導に当たっています。この空気こそ曲者であり、常に険しい顔して、怒鳴り声を上げることが指導のような錯覚に陥るわけです。反対に、そうしないと怠けていると思われるので、つい、そうしてしまいます。およそ教育とはほど遠い空気に包まれた中では、わかりつつも

そうしてしまう所に、体罰や暴力と同じ根が潜んでいるのだと思います。

或いは、冬期の耐寒駆足はどうでしょう。寒さの厳しい中、厚着をしている教師の側を、体操服一枚で走っている子どもの姿はないでしょうか。暑かったら脱ぐ、寒かったら着るなど、自分で体温調節をすることが目的であるはずなのに、「子どもは風の子」ということで、薄着を強いることに必死になる教師がいます。非科学が体罰や暴力と近い位置にあるのだという自覚をすべきでしょう。

私たちは、このような根を一つ一つ摘み取って行かなければなりません。「これって体罰？」と、日々の指導に疑いの眼を向け、体罰の根は潜んでいないのか、広くは人権の視点に立って問い直す必要があると思います。

(まきの みつる／大阪・香芝市立下田小学校)